

2007

ひびき

暴力からの解放を：
虐げられた人によりそって



彼らは自分たちが突き刺した者を見る
“They shall look on Him whom they have pierced”

表紙：

彼らは自分たちが突き刺した者を見る（ヨハネ19：37）

They shall look on Him whom they have pierced

（2007年四旬節 教皇メッセージより）

はじめに

カリタスジャパン 責任司教 宮原良治

学校での「いじめ」による子どもや学生の「自死」がひんぱんに報道されています。いのちがかけがえのないものとして輝いて欲しい、尊重されて欲しいと願いながら、どこかに無力感を感じるのも事実です。

今年の小冊子「ひびき」は、誰もが立場によっては加害者にもなり得る「いじめ」「虐待」「暴力」などをテーマに選んで、その現実にも真正面から向き合ってみました。

聖書も、このテーマから目をそらすことなく、その現実を生々しく紹介しています。本来、支え合い助け合うために創られたアダムとエワは、神への背きの後、自己弁護と責任のなすり合いの関係になりました。アベルとカインは神への奉物のことで殺し合う関係になりました。ヤコブとエザウは祝福を受けるために、骨肉の争いをする関係になりました。ヤコブの子どもらはその兄弟ヨゼフをエジプトに売り飛ばしてしまいました。しかし、これらの営みから、最終的には神が人類に介入するという不思議な御業「過ぎ越し」と「約束の地への導き」を体験しました。

イエス・キリストも、この現実から逃げることは決してなさいません。受難の当日、弟子達には「剣を鞘に納めなさい」と暴力の行使を諫め諭しながら、自らはローマ兵の刃に身を委ねます。つまり、自分の身を「暴力」と「虐待」の真中に置かれ、そのことで苦しむ人の最大の理解者、同伴者となられます。そのために、あらゆる罵倒、ののしり、蔑み、茨の冠、鞭打ちを受け、両手足を釘で打ちつけられます。それは、最終的に「過ぎ越しの神秘」「救いの実現」へと導くためでした。

この小冊子「ひびき」が、「虐待」や「暴力」に真摯に目を向けながら、神の不思議な御業である「過ぎ越しの神秘の体験」へと導かれることを願って止みません。

1. モラルハラスメント (DV)

ばとう 罵倒され、 じそんしん 自尊心を傷つけられ、… にんしん 妊娠9カ月、顔を張られた

「モラルハラスメント（精神的暴力）の世界にいた私は、権力、地位、金、そして肉体的な力をもって夫にがんじがらめにされ、息もできない状態でした。私を脅かしていたのは『チェッ』という彼の舌打ちなんです。それが爆発の合図。未だにだれかが舌打ちすると、私の身体は血が引いて、汗が出て過呼吸の症状になるんです」と語る五月さん（39、仮名）は、二児の母親だ。2年前に離婚した夫は大手企業のサラリーマン。世間的には「良きマイホーム・パパ」と見られていたが、実はモラルハラスメントの加害者だったのだ。モラルハラスメントが虐待の一つだと理解され始めたのは最近のこと。従来はいくら被害者が訴えても、「それって虐待なの」と片付けられていた。力で相手を支配する手段が身体への暴力ではなく、言葉による精神的な暴力なのだ。それは身体的暴力を受けたと同じ大きなトラウマ（心的外傷）をもたらすと言われている。いったい五月さんは、どんな虐待を受けたのか。

結婚して1カ月で始まった

「女性は20代も後半になると、いま、交際している彼を逃したら、世間に認められるような結婚のチャンスを逃してしまうという焦りがあった…。ささいなことに妙に口うるさい人だなという不安な面もありましたが、結婚すれば、家庭的なのかもしれないと…」

彼とは友だちの紹介で知り合い、3年の付き合いになる。結婚式をあげる段になると、彼の両親も「好きにやれば…」という雰囲気で大らかだった。大手企業に勤務し、家計のことでやり繰りの苦労はなかった。

結婚して1カ月もたたないある日、モラルハラスメントが始まった。

彼がコンピュータを教えてくれるというので、「お願いします」とイスに座り、指示通りにキーを叩く。「あら、間違えた」と、かわいげな

一言をもらすと、「なにー、こんなことがわからないのか」と、彼はいきなり大声をあげた。

「これしきのことで怒鳴らなくても思いながら、『ごめんなさい』と言ったら『謝ればイイっていうもんじゃないだろう』と怒鳴られ、彼の気持ちが高ぶったのか、大声で私をバカ呼ばわりし、悪態をつき、怒り、罵倒したんです。それが2時間以上もですよ。私はあっけにとられ、体が小刻みに震えてきました。翌日から、私の一つひとつの所作に彼の一言がうっとうしく、まとわりつくようになってきたんです」

深夜まで罵倒は続く

突然、大声で怒鳴り出す。時には大声でやり返すが、五月さんが平身低頭して彼の支配に屈しない限り、責め続ける。「こんなことで」という思いが態度に表れると、夜中の2時、3時まで続く。ある時は寝入っている五月さんを「よく寝ていられるな」と起こして怒鳴り、罵倒し、寝かしてくれない。やがて「ごめんなさい」と謝るだけではすまなくなる。「こんなことをして、申し訳ございませんでした。あなたの言う通りでございます」と、おわびする毎日となっていく。

「毎日、彼の機嫌を損ねないように気配りの緊張でしよう。そして彼の地雷を踏んで爆発すると、私の好み、生活習慣、価値観、生き方が否定され、放心状態にさせられる。私から自信や自尊心がどんどん失われていく感じになってきて…。彼は私には指一本触れず、言葉や表情、態度で私をケチオンケチオンにやっつけることができる人でした」

食パンの耳が皿からちょっとでもはみ出ていると、「大きな皿に移せ」。「みそ汁を先に給仕するなら、お総菜の煮付けは後にしろ」。店頭で平積み雑誌は「上から3冊目を買うのだ」。「子どもに甘い物なんてとんでもない」と、五月さんの一挙手一投足に口をはさんでくる。

「あまり言いたくないんですが、彼の父親は戦後のどさくさで自分の夢をかなえられなかった人で、そのためか父親は自分のできなかったことを彼に押しつけたんです。だから彼は幼少期から好きな事を取り上げられ、進学塾で勉強を強いられ、親の望む有名大学から大手企業にと就

職させられた。考えてみると彼も父親からのモラルハラスメントの被害者かもしれません。父親の言うままに従ったから多様な価値観を受け入れることができない。周りがどうであれ、自分の考えが世界基準であり、彼にはそれですべてがうまくいったという自負心がある。逆な見方をすれば、自信のなさの裏返しだと思います」

身ごもっている私を、彼は殴った

「第1子が生まれ、子育てにも追われた私は精神的に疲れきっていたし、自分を見失っていたと思います。そんなにされても気持ちのどこかで彼とつながっていたかった。つながってさえいれば、いつかは彼も変わるだろうという切なる思いがまだあったんです」

そんな思いも捨てなければならぬ事態が起きた。第2子を身ごもって9カ月目に入ったときのことだ。いつものように、出社する彼のシャツを揃えていると「なぜ、いつも同じ柄なんだ」という声が出た。10秒ほど返事につまっていたら「ぼやぼやするな、答えろ!」という声と同時に顔面をたたかれ、鼻血が出るほど連打された。

「私のお腹には子どもがいるのに、この人は私を殴ったんだ。ハッと我に返り、この家を出ていかねばという意識が鮮明に走ったんです。置き手紙には『あなたとは仲良くしていきたいと思っていました。でも、このままではうまくいかないのを出ていきます。疲れを取り戻し、自分を取り戻したい、あなたもそうしてください』と書いたんです」

結婚して5年がたった。外面の良い夫はマンションの住人には「実家の母の具合が悪く、実家に戻ってます」と言い訳し、実家には「あいつは何が気に食わなくて、出ていきやがったんだ」と、不機嫌な電話をしていたことがわかった。

「別居前に新聞の家庭欄に載るドメスティックバイオレンス (DV) に関係する記事の切り抜きをしていたんです。ドメスティックバイオレンスに自分があるなんて思いたくない、あまりにも惨めだ、辛すぎて悲しすぎる、こんなことは夢であってほしかった。家を出てから、自分の置かれている状況がわかってきて、思いつくままに、行政の相談コ

ーナー、精神科医、カウンセラー、法律相談などに電話をかけまくって、そして、現実を思い知らされました」

2人の子どもを連れて、精神科のクリニックに1時間半もかけて泣きながら通った。子どもを預かってくれる所を探す苦労は切なかった。

「ある時、私は精神科医に『私は彼と別れたくないんです』と打ち明けた。『それが問題です。あれだけの虐待を受けているのだから、健全な精神状態なら別れたいと思うのが普通です。アメとムチの攻撃を受け、あなたは捕虜（はりよ）のようにマインドコントロールされてしまっています。治療を受けなさい』と言われ、閉塞（へいそく）された環境から飛び出ているが、心は未だに、解放されてはいなかったことに気付かされました」

支配にこだわる夫

別居中、協議離婚の話し合いに入った。彼は弁護士を通して「申し訳ない。ごめん」とか「良い関係をつくりたい」と必死に訴えてきた。五月さんは彼が加害者の更生プログラム（こうせい）を受けるように取りはからってもらった。これまでの間違っている行動パターンに気づき、それをそぎ落とし、健全なコミュニケーションを学ぶ作業プログラムだ。彼は週1回のカウンセリングを5回受けた。そして担当のカウンセラーが同席の上、五月さんは彼と会った。

「カウンセラーは彼からされた事で、私がどんなに傷ついたかを彼に分かりやすく説明しました。それを理解できないことには自分を変えていく次のステップに進めないとカウンセラーも私も感じていました」

カウンセラーの「どうでした、理解されましたか」という質問に、彼の口から出た言葉は、「それはそうだけだね。でも…ひどいよ。俺ばかりのせいではないだろう」というひと言だった。

「私には、彼がしたことは虐待なんだと気づいてほしいという期待があったけど、結局、彼は昔のままのところに戻ればいいだけのことでないですか。私を支配することで解決することしか考えてない。何も変わってない。私は、あのモラルハラスメントの世界には絶対に戻らない、離婚するしかない、それで私は離婚しました」

※本文は「レジリエンス」（「あとがき」参照）の協力をいただきました。

2. DV加害者

「緊急退避」^{きんきゅうたいひ}を宣言して、妻子が逃げる

自分は果たして暴力^{ぼうりょく}をやめられるのか

秋口がよく晴れた日曜日の昼下がり、休日^{かんさん}で閑散とした都内のビルの一室で開かれたDV加害者の会「アウェア」^{*}の教育プログラムに参加している牛尾宣夫^{うしおのりお}さん（42、仮名）を訪ねた。ちょうど、ミーティングが終って部屋から10数人の30代から40代の男性たちがぞろぞろと出てくる場所だった。週日のビジネス・スーツの代わりに休日用のカジュアルなスタイルで決めたセンスある紳士たちが、妻や恋人^{ごやくたい}を虐待した加害者だと、だれが想像できるだろう。社会的に信頼されている人たちであることは、風貌^{ふうぼう}を見ただけで分かる。

宣夫さんも、ここに通って1年9カ月になる。「アウェア」代表の山口のり子さんは「彼は変わりました」と言う。だが妻は「もし今後一生私とやっていくとしたら、アウェアに一生通ってほしい」と、厳しい条件を出しているという。それほど日本社会では「妻は夫に従うもの」という封建思想が社会構造として深く根をおろしているため、加害者が自分のしたことを心底、悔い改め、再び妻と共によい関係を築きながら生活していくことは難しいのだ。

妻が娘と実家に緊急退避

「今から2年前の10月、突然、家内は『もうあなたとはやっていけません』と就学前の娘を連れて、緊急退避とだけ言い残し、実家に戻ってしまったんです。こんなことが起こるとは思いもしませんでした。家族と別れるなんて考えてもみませんでした。まさに晴天の霹靂^{へきれき}でした」

宣夫さんは都心から1時間ほどの郊外に住み、霞ヶ関官庁街の役所に通う公務員である。若い頃は剣道をやり、先輩をたて、礼節をわきまえることを心がけたという。

「確かに日常的にはよく手をあげて殴る、時には、泥酔^{でいすい}して家内に馬

※印については「あとがき」参照

乗りになって殴りつけたこともありました。娘が見ていました。身体的暴力だけではありません。家内の実家にはつまらぬ陰口をきくな、と脅したり、へ理屈をこねて、大声をあげて追い詰め、自分の考え方や生き方を強要してきたんです。結婚前もそうでしたが、結婚したいという欲がありますので、抑止力と言っちゃ何ですが、自分を抑える力が少しはあったと思うんです。ところが結婚してしまうと、夫婦は一緒に行動すべきという思いがあって、ますますひどくなっていったんですね」

別居した妻は、実家の事情もあったのだろう、4カ月後には娘を連れて戻ってきた。しかし謝罪をしても、単なる口先だけだと許してくれなかった。このままではいけない、反省と冷却期間を置くために今度は宣夫さんが自分の実家に戻り、よりを戻す算段をする。

「なぜ、こんなことになったのかと自分を責めまくり、おかしくなりました。でも別れることは避けたい。なんとかしなくてはと相談のしてくれる所をインターネットで検索したり、市の相談コーナーにも行きました。しかし離婚を前提とした調停の手続きとか、離婚回避のための謝罪や愛情表現の仕方とか、自分の相談したい内容ではなかったんです」

職場の先輩にも悩みを打ち明けてみた。親身になって聞いてくれたが、解決策がない。逆に「そりゃ、女が悪い」と片づけられたり、女性の同僚からは「嫌なら、早く別れりゃいいのにねえ」と言われる始末。これがごく一般的な世間の常識なのだった。

苦悶くもんのなかでDV加害者プログラムに

「実家で苦悶の日々を送っていたら、家内から『あなたとは、もう、これ以上やっていけません。ここにでも行けば』という最後通牒つうちょうの断りの付いた『アウェア』の案内書を受け取ったんです」

「アウェア」の「DV加害者プログラム」には「DV被害者支援の一つの方法として実施する、暴力を振るう男性のためのグループで行う教育プログラム」と書いてあった。そして教育プログラムは、女性のファシリテーター（進行役）が、女性やDV被害者の代弁をしながら、暴力は

犯罪であり、力と支配の発想が基で、あくまで自分の選択によるものだ、といったことを話し合いのなかで学んでいく、という説明も書いてあった。宣夫さんは理屈抜きで暴力をやめることに挑戦することを決めた。毎週日曜日午後2時から2時間、通い続けた。

「4カ月ぐらいたって、それまでは別れたくない一心だったのが、考えが変わり始めまして。たとえ今の結婚生活が維持できなくても、その後、自分自身が暴力を犯す素質、精神構造を抱えたまま生きていくと、また再婚しても同じことをやるんだ、だから自分自身の問題を解決しなければ、次のステージがないことに気がつきまして」

そんなときだ。いつもプログラムの話し合いに参加している山口さんから「あなた方も親からの暴力の被害者なのだから、心底から暴力との断ち切りをするなら、親にたいじ対峙してみたら…」という提案が出された。

宣夫さんは自分の幼少期を振り返ってみた。父親は母親にひんぱんに暴力を振るっていた。時には母親が110番をして、パトカーが駆けつけたことがあった。だが当時は「これは家庭内のいさかいだから民事だ」と引き揚げていった。母親は安全を求めているのだった。

暴力を振るった父親に対峙

「私の暴力の心的傾向は幼い頃から家で見聞きしたなかではぐく育まれてきたのではないかと気付かされました。でも親は年をとっている、ガチガチの戦前派という古い体質の人間に対して、何を言ってもしょうがないという思いもあったんです。だけど、私はぶつかりましたね。『俺が別居して家に戻っているのは、子どものころ、親父がおおれふくろにいつも暴力を振るっていたことが影響しているんだ』と」

母親は2度ほど、「すまなかった」とわびた。しかし「男は絶対だ」という家父長制度の強い社会で生きてきた父親はキレて、宣夫さんに殴りかかってきた。

「それはそれで自分の心の中の整理はついて、『ああいうふうにはならない』『言っても無駄だ』と、昔と同じ気持なんですけど、親子の間のわだかまりを自分なりにけりをつけたことで、余計に暴力をやめるという

決意が新たにされて良かったと思ってます」

宣夫さんは、毎日曜日の午後、1年9カ月通い続けた。虐待の加害者の多くは、4、5回で来なくなる人が多い。それまで身に付けてきた信念や行動が間違っていると指摘され、暴力を振るってきた自分と向き合うのがつらくなってくるからだ。宣夫さんも同じだった。

すぐ怒る昔の自分に戻ってしまうが……

「暴力の根源にあるものは、暴力や精神的プレッシャーをかけて相手を自分の思い通りにしたいということですね。思い通りになると結果的に自分が一番楽で、気持ちいいのです。相手の立場を一切考えない、人格を認めない。夫婦たるものと同じ考えでいくべきだと勝手に自分で思い込んでいて、それに従わないと、手をかえ品をかえ、泣き落としまでして相手を従わせるんです」

プログラムに参加していくうち、男性中心の社会構造そのものが男性に暴力を選択させて、暴力による支配を生み出していることに気がつき始めていく。そして5年間にわたって夫からモラルハラスメント（精神的虐待）を受けて2年前に離婚した五月さん（本誌1. モラルハラスメント参照）が、ゲストとして語ってくれた彼女の生々しい体験を聞いて、自分が妻にしてきた精神的な暴力の恐ろしさを初めて実感できた。

「彼女の話聞いて、情けないことなんですけど、私の考えが全部変わったという感じで…。あの手この手を使って、家内を精神的に拘束することを無意識にやっていたわけで、暴力をボンと振られるよりもつらいことが本当によく分かりましたね」

だが知らず知らずのうちに、身に付けてしまった暴力支配の習性を完全にそぎ落とすことは、至難の業のようだ。

「日曜日にアウエアに来て自分をリセットする、でも木曜日か金曜日になると、暴力を振るわないにしろ、わがままが出て、自己中心になり、すぐ怒る昔の自分になっているんです。でも最近ようやく娘がいろいろ話をしてくれるようになってきました。このまま娘に傷が残らなければいいなと思うんですけど…」

突然、言葉を失った高校生の娘

知らず知らずに連鎖する無言の虐待

「私が恥をさらしてもお話ししようと思ったのは、精神的な静かな虐待が知らず知らずのうちに親から子ども、そして孫へと連鎖することを、そして子どもに過大な期待をかけ、親の思うようにしようとするのはよくないと痛感したからです」施設職員の井出宏さん（57、仮名）は、こう切り出すと自分の苦しかった過去の体験を語り始めた。昨年6月には奈良で、中高一貫名門進学校の高校1年生（16）が、自宅に放火、母親ら3人を焼死させる事件が起きた。またいじめによると思われる小、中学生の自殺が相次いだ。受験競争はますます激しさを増し、親の過剰な期待は、子どもたちを追い詰めていく。

「私、精神病院に入りたいの」

「娘の英子（仮名）の声が出なくなったのは、高校2年の1学期末の試験中でした。その時、私は不用意に『数学ができないくらいでショックを受けてるんじゃないよ』と、娘に言ってしまったんです。彼女は状態が急激に悪くなり、部屋から出てこなくなり、声は出ず、手足は冷たくなって。筆談で『精神病院に入りたい』と訴えたんです」

英子さんは小さいころから、皆から「いいお子さんね」とうらやましがられるほど、良い子だった。小、中学校時代の成績も優秀で、教師からも頼りにされ、何でも任された。親に心配かけずに大学進学で名門の私立女子高校に入学できた。

「彼女が中学3年の受験期に、私の実母である彼女の祖母は、がん末期の鎮痛剤過多で、尿管をつけたまま、意識混濁の寝たきり状態でした。部屋は糞尿のにおいで息もできないほど。介護する妻は疲労困ぱい状態で。娘は『私がおばあちゃんの世話するから、お父さんお母さん、外でお茶でも飲んできて』と、何も反応をしない大好きな祖母に話しか

けたり…。介護疲れの両親がいさかいを起こさないよう気をつかったんですね。だから声が出なくなったのも、きっと良い子が続けて無理をしたんだと、私が若かったときの体験から、そう思ったんです」

英子さんが希望するので、病院を3カ所訪ね、精神科で機能検査を受けたが、いずれも異常は見つからず、結局、精神保健福祉センターでカウンセリングを受けることになった。

「ほとんど妻が付き添い、私も時々仕事を抜け出し、娘と帰りにお茶をしたりしましたが、私と妻は仕事、娘は勉強という毎日のなかで、久し振りに親子のゆったりした時間を過ごすことができました」

一緒に寝ながら若い時の悩みを語る

やがて学校へ行かなくなった英子さんの睡眠サイクルがおかしくなって、昼夜逆転の生活となっていく。

「私は施設職員として、さまざまな子どもの問題を調べていましたので、子どもに何か不調が起きたときは、親のそばで寝かせるのが一番だと考えていました。私と妻との間に川の字になって娘を寝かせ、もう一度甘えていいんだよ、というサインを娘に送ろうとしたんですが、娘は娘で親に悪いことをしていると感じたそうです」

寝ながら、井出さんは一度も娘の英子さんには語ったことのない胸のうちを初めて明かした。「実はね、お父さんも昔、お前のように、苦しくて悩み、自殺までしようと思ったことがあるんだよ」

井出さんの両親は見合い結婚したが再婚同士で、母親は息子を亡夫の親元に返し、再婚した夫が連れてきた2人の子の世話をした。そして夫の反対を押し切って産んだのが井出さんだったことも。

「そもそも結婚する思惑^{おもわく}がお互いに違ったんだね。おふくろは親父にかわいがってもらえると期待したのに、親父は2人の子どもを世話してもらいたいから結婚したので、愛していたのではなかった。しかも親父は貧しい農家に生まれ、夜間大学を出て公務員に、おふくろは城主の家系で、クラシックが大好きの大正時代のモダンガール、最初からうまくいくはずがなかった。そんな環境でお父さんは、大変だったんだよ」

大好きだった祖母の若い頃の話に英子さんは、耳を傾けていた。

「物心ついた頃の記憶はね、親父とおふくろがいつもけんかして、ひどいときには親父はおふくろの髪の毛をつかんで引きずり回すんだ。そしておふくろは私に『もうお前しかいないのよ』と言いながら子守歌を歌い、寝るときには私の枕元で『逃げようね、いつか、この家から逃げようね』と口癖くせのようにささやくんだね。でもおふくろに厳しかった親父は私を一度も殴ったことはないし、嫌いではなかったんだ。おふくろの言葉をどう受け止めてよいか、お父さんはわからなかったんだよ」

母親は常に「勉強しなかったらどうなるの」と言って、井出さんを机に向かわせた。「おふくろはかわいそうだ、おふくろの期待に添わねばという気持がはたらいたんだね。それでね一生懸命、頑張って勉強したんだ。勉強すればするほど成績は上がっていく。でも無理をしたんだなあ。無言の圧力が、今でもテストが書けず白紙で出す答案の夢を見るんだよ」

死ぬ勇気もなかったんだ

子どもが大好きだった井出さんは、心理学を学んで、子どもとかかわる教師の仕事がしたいと思っていた。だが親の期待は違った。悩みに悩んだ末、結局、父親の「経済に行け」というひと言で、期待通りに私大の経済学部に進んだ。しかし勉強には熱が入らず、貧困家庭の多い地域のセツルメント（定住型福祉グループ）のボランティアを始めた。

「ある時、住民の一人に『あんたのような学生に私たちの気持はわからないでしょ』と言われたんだよ。それでね、ここの人間になってやろうと思ったんだ。親に金を出してもらって、のうのうと大学に通っていることに罪悪感がわいてね。だけど大学を中退すると親に言ったら、おふくろはがっかりするするだろうな、それだけでなく、自分自身を責めるだろうし…、学歴のなさ故に職場の後輩に追い抜かれていく親父の怒る姿を見ていたから、親父はものすごい剣幕で反対するだろうな。そう考えると、親の期待に沿うことも、反発することもできない自分が情けなくて、自殺も考えたんだけど、死ぬ勇気もなかったんだ…」

涙を流している父親を娘は黙って見ていた。

静かな虐待、優しい暴力

結局、家を飛び出し、大学を中退した井出さんは、セツルメントで献身的に働いていた女性と結婚、英子さんが生まれました。親子三人が川の字になって寝ながら、井出さんが自分の過去を語り続けた日が1週間は続いたでしょうか。それから1カ月半後の日曜日だった。

「ミサで目の見えない人が見えるようになり、聞こえない人が聞こえるようになった、という神父さんの説教を聞いて帰ってきたら、かすれた小さな声が娘の口から出たんです。最初の言葉が何だったかは覚えていませんけど、確か『お父さん』か『お母さん』だったと思います。本当に神様に感謝したのをはっきり覚えています」

英子さんは、その後、高校3年のとき大学進学を断念してから、みるみる元気を取り戻し、趣味の小説を書き始め、パートで働きながら、知り合った男性と結婚、今は幸せに暮らしている。

「娘には良い大学へ行けと言ったことは一度もありません。むしろ成績には無関心を装っていました。しかし、どこかで、この子はきっとすごい大学に行くのではないかと思っていたかもしれません。私も娘も親や学校の支配と期待に沿った優しい良い子を目指し、無理を重ねたのでしょう。本音や弱音を言える家庭ではなかった。静かな虐待、優しい暴力という言葉がぴったり当てはまるかもしれません」

虐待のメカニズムは複雑だ。加害者と被害者が状況によって入れ替わり、それが親から子ども、孫へと連鎖し続ける。虐待が起こりやすい環境は、長期間、親密な関係があり続けるところ、つまり家族であり、もしかしたら教会もそうかもしれない。そんな危険な場で生活し続ける私たちはどうしたら虐待を防ぐことができるのだろうか。あるベテランカウンセラーは次のような提言をしている。

「そういう環境で生活しているという現実を認め、危険が潜^{ひそ}んでいることを自覚するだけでも、安全な人間関係を営むことができます」と。

絶望的な薬物依存症で刑務所へ

ありのままを受け入れられて回復に

「暴力の爆発の背景には、暴力でしか表現できない恨みや怒りの蓄積があると思うよ」東京・東麻布にある心の相談室（IFF）の地下一階。引きこもりの青年たちに囲まれながら、富永滋也さん（38）^{とみながしげや}※は、自分の過去を振り返る。幼い頃に母親からの虐待を受けた。大学生時代にマリファナに手を出した。いったん足を洗って通信社に入社。阪神淡路大震災やサリン事件を取材、警視庁を担当したとき、覚せい剤の依存症になって逮捕された。刑務所で3年8カ月服役後、薬物依存症の「東京ダルク」等の自助グループに通い、大学院で3年間、臨床心理学を研究。今は心理カウンセラーとして働いている。

犬までかみついてきた

「内科医の父はアルコール依存症でした。僕に似て、いい子ちゃん仮面で、しらふの時は優しいんです。猫まで声で子どもに接する人ですが、酒を飲むと性格がひっくり返るんですね」

父親は晩酌^{ばんしゃく}でウイスキー4、5杯飲むと、ちょっとした弾み^{はず}で母親とけんかし、茶碗が乱れ飛ぶ。翌日の朝、しらふになった父親が母親の前で土下座^{どげざ}して謝るという毎日が繰り返されていた。

「そのストレスを母親は私にぶつけてきたんです。とにかく幼児期からよく殴られてました。小学生のころは馬乗りになってたたく母に部屋の隅まで追い詰められ怒鳴られた。飼ってる犬までガブガブ足にかみついてくる。僕の体のところどころには、母親に押し付けられたタバコのやけどがいまも残っています」

近隣からは何事もない家庭のように見られていた。名門の慶応幼稚舎から大学まで進み、高校時代は運動部のキャプテンを務めた。

「僕はありのまましていると殴られ、両親の求めることに合わせて努力

※印については「あとがき」参照

すると喜ばれた。自分にとって愛されることは、人の期待にこたえることだと、子どものころから刷り込まれていっちゃったんです」

大学時代にマリファナを吸う

大学に進学して家を飛び出るようにして下宿。友人と六本木で飲んだら、先輩の家に誘われた。

「当然のようにマリファナが回ってくる。『嫌だ』と言えていたら僕の人生は違っていた。でも断ると仲間外れにされる。一発吸ったら、おもしろいの、なんの。それから転げ落ちるようでしたね」

他大学の女子大生と付き合い、インドに2回出かけ、二人でヘロインを経験したりする。

「二人で一緒に薬物を使い、生活はグチャグチャでした。生き方よりも死に方を探していましたね。彼女が他の学生と浮気しそうになったとき、見捨てられる不安から彼女のお腹を思い切り殴ったんです。その断末魔の叫びがものすごい罪悪感になって、一回は薬物を止めたんです」

ボクシングジムに通い、汗を流す生活に浸った。大学3年の秋に入社試験があり、通信社に入社した。大阪社会部で大活躍し、4年後に同期では最初に東京本社に戻り、警視庁記者クラブ担当になる。

「安定した人間関係を築くためのしっかりした核とか価値観が育っていないから、ひどいワーカホリック（仕事依存症）になりました。5の仕事やってくれと言われると8の仕事で返さないと不安なんです。子どものころに染みついてしまった『評価されることが愛されることだ』ということを仕事でもやり続けるわけですよ。名刺一枚でだれでも会ってくれる。魔法の絨毯に乗っちゃったというか、快感だったですね」

大学時代に付き合っていた女性と結婚、子どもが生まれた。刑事宅への朝駆け、夜回りで帰宅できず、車で仮眠2時間という日が続く。

「僕がたまに帰宅すると、嫁さんが自分のことほっといてと、赤ん坊抱いて泣き叫んでる。でも僕は子どものころにかわいがられた覚えがないから、愛し方がわからないんですよ。おれ、こんだけ一生懸命、お前のために働いてるじゃないか、としか言えないんですよ」

阪神淡路大震災の^{せいさん}凄惨な現場取材を終えたときには、燃え尽き状態になっていた。そんなときだ。大学時代に一緒にマリファナを吸っていた仲間から電話がかかってくる。会った。彼は覚せい剤を続けていた。

「今の急場だけでもしのげればと思って、一回、彼に付き合うんですね。自分の力で一回止めた経験があるから、チョットぐらい大丈夫と。それからは地獄でした。絶望的な薬物依存症になってしまうんですよ」

妻は覚せい剤を始めたことを知って、赤ん坊を連れて別居した。

「僕の心の中は空っぽでした。自分の人生を自分の力で生きられない恨みや寂しさだけが渦巻いていたと思う。それを消すために薬物が必要でした。覚せい剤と、睡眠薬代わりにマリファナを吸って…」

夏の暑い日、大麻取締法違反で逮捕された。28歳だった。懲役1年6カ月、執行猶予3年の判決を受けた。覚せい剤をやめられず1週間後、フラッシュバックと^{げんかくもうそう}幻覚妄想のなかで再び事件を起こした。タクシー運転手を失神させ、タクシーを奪って逃走。警察の機動捜査隊に取り囲まれて逮捕された。判決は懲役3年10カ月。前回のと合わせて5年4カ月の実刑となり、栃木県の黒羽刑務所へ。

母と父を恨みに恨んだ

「刑務所での日記は、最初のうちは恨み事ばかりだった。おれは生まれたくてあんな家に生まれたわけじゃない。独房でアダルトチルドレンのことを勉強するうちに恨みばかりが出てきて…」

母親は入所して半年後に面会に現れた。

「本当に小さくなっちゃって。今でも思い出すと涙が出てきますね。おふくろは面会室で、ただ泣いてました。たった一言、言ったことは『私はいい母親じゃなかったかもしれないね』でした。面会室のセルロイドの窓をなでるんですよ。僕に手が届かないから。僕は独房に戻っても一人で泣いてました。そのころから考えが変わってきたんですね。薬さえやらなかったら、こうはならなかったと…」

薬物依存症や虐待についての本を読みあさった。3年8カ月で出所した。自宅に戻り、すぐに東京ダルクを訪ねた。ダルク創設者の近藤恒夫

さんに「君が来るのを待ってたんだ。一緒に働いてみないか」と言われた。自宅からダルクに通い、ミーティングに参加した。

「最初は高慢さの塊でした。自分の病気を否認して仲間を裁き続けてきました。『壊れてる』と仲間と言われると、壊れてるのはお前だと思ってしまう。心のなかは怒り、恨み、不安、完璧主義、他人を裁く高慢さでいっぱいだった。盗み、ウソ、性的逸脱、すべてが病気のなせるワザで、自分の寂しさからきている。そんなことを涙を流しながら『寂しい』と訴える仲間に、自分の気持ちを語ることを教えてもらったんです」

父親の襟首をつかんで頭から酒浴びせ

覚せい剤への依存は止まったが、今度は摂食障害になる。冷蔵庫にあるものを食べまくった。深夜、目を覚ますと、吐いた汚物のなかで便器にしがみついている自分に気がついた。ほとんど夢遊病状態で、食べては吐いていたのだった。

「絶望感に陥って、死んだら楽になれるかなと。その時、深夜だったけど12ステップを使う自助グループの先輩に電話したら、『お前なあ、ええやないか。薬止まらんかったとき俺たち、どれだけ苦しかったんか。薬止まったんやから、ええやないか。そのままでええんや。生きる』って。その温かい言葉を聞いて、本当に号泣しましたね」

深夜、帰宅すると父親が泥酔状態だった。マンションのドア開錠を面倒くさがって「チェツ」と舌打ちしたのを耳にし、カッととなった。

「父に苦情を言ったわけです。『あんたは昔からそうだ。酒を飲むといつも自分が一番子どもになって、家族の気持ちなんか省みたことがあるのか』と。そしたら『何言ってるんだお前は。ここはおれの家だぞ』みたいな言い方をしたんで、えぐり取られるような感じになってスイッチが入り、爆発したんですね。カッとになって気がついたときには、父の襟首をつかんで、飲んでいた酒を頭からバシャバシャかけていました」

翌日、ミーティングで一部始終を語ると、仲間が「ようやく言えたんだな。よかったな」「いつか埋め合わせをしろよ」と慰めてくれた。

「閉鎖的な人間関係、家族関係のなかで、問題を抱えていたら、次の

怒り、次の暴力へと、どんどんエスカレートしていったと思う。僕にはそれが出せる場所があった。ありのままの僕の話聞いてくれる人、仲間たちがいたんですね。それで救われました」

人は物語を生きる

富永さんが尊敬してやまないセラピストがマイケル・ホワイトだ。ナラティブ（物語）・セラピーの創設者で、「人は物語を生きる」という理論を編み出して、注目された。

「僕は自助グループのミーティングでたくさんの仲間から言葉をおきなを補ってもらったりして回復してきた。自分の過去がどうだったのか、本来こうあれば、もっとよかったかもしれないのに、こうだったということをも自分でも総括そうかつしたりして、自分のなかの物語がどんどん書き換えられていく。その経験が僕を支えてくれていると思っています」

刑務所に服役中は父親や母親を恨んだ物語だったが、今はゆるしと感謝の物語になってきた、という。

「たとえばミーティングで仲間が『母親との関係でゆるすという視点が入ると、過去の記憶と現在の関係を切り離せる』と話すのを聞いた。ゆるすという感覚はそれまでなかった。そうかゆるすのか、と思うと、自分もこれだけのことをしてきたのにゆるされてきてるじゃないか。そうした経験を重ねるなかで、自分の中の物語を更新してきているんです」

「母親からの虐待も、父との関係の悪さも、僕の家族の問題全般が、僕の人生にとって負うべきものだった。僕の父も母も、幸せな家庭では育っていないんです。確かに一時は薬物依存という状態になりましたが、僕にとって一番大きいのは、その自分の家族の問題に全面的に気付けたこと。そして生き方を変えることができた。僕はいま、両親との間にかつてないほどの信頼関係を築いています。今はありのままの自分を受け入れることができているから、その結果として、過去のいろんなものを受け入れることができているんだと思います。そして僕の使命は、回復のプロセスで僕がもらったさまざまな経験と希望を、まだ苦しんでいる仲間たちに伝えていくことだと思っています」

一人息子を^{じし}自死で失った

その母親は虐待されて育った

最近、自殺願望を持った若者たちが増えている。自殺系サイトで知り合った見ず知らずの他人同士が一緒に自死する事件が日本各地で多発している。九州地方のある小都市で、重度心身障がい児施設で働く北村恵子さん（56、仮名）の一人息子である^{いっくお}郁夫さんも、そのひとりである。

2002年の春、自殺系サイトで知り合った女性と一緒に生活するうち、21歳の郁夫さん（仮名）が最初に、そして彼の後を追ってその女性も間もなく自死した。あれから4年。残された恵子さんは、寂しさと苦しみのなかで、なぜ息子が自死の道を選んだのか考え続けてきた。「私自身が幼児期から母親に虐待されたことによって、人生をしっかりと受け止めることをしないで生きてきてしまいました。私は子どもの気持を大切に育てたいと思ったのに、まるで正反対のことをしてしまいました」と、恵子さんは過去を振り返る。いったい何があったのだろうか。

中学2年の時に不登校に

私立病院の病棟看護婦長として仕事に追われていた恵子さんの職場に、当時中学2年生だった郁夫さんが通っていた中学校から電話がかかってきたのは2学期が始まって間もなくのことだ。

「子どもが1学期から学校に来ていない、という電話でした。私は朝早く、子どもが学校に行く前に出勤するので、学校に行っているものとはばかり思っていたんです。それから気を付けて様子を見てみると、子どもは学校へ行こうと玄関に立ちますが、一歩が踏み出せなくて。担任の先生と3回も相談しましたが、先生が子どもの気持を理解しようとしなかったので、『学校に行きなさい』とは言えませんでした」

恵子さんは30歳のときに職場結婚、郁夫さんが生まれた。だが郁夫さんを出産した直後に離婚。それ以来、母子二人暮らし。ゼロ歳の時から

保育園に預け、小学校では学童保育の世話になった。

「子どもは小さいころは明るい子でした。保育園のときには、友達のおばあちゃんに自己紹介したり。わりと器用で、記憶力もすごく、本当に私の子どもなのかと思うぐらいでした」

不登校状態を知って1週間たったある日、郁夫さんが「お母さん、僕は学校へ行かないけど、悪い子にならないからね」と話しかけてきた。

子どもの苦しみ

「学校に行かせようと思ってはいけなないと考えるんですが、子どもの将来を考えると学校に行けるようにしないといけないと思い、カウンセリングに通うことにしたんです」

カウンセリングに通い始めて3年。郁夫さんの気持ちが少しずつわかるようになってきた。郁夫さんも母親の変化に気がついたのか、ほとんど成り立たなかった親子の会話が少しずつ始まった。

「子どもの話を聞くようになって、それまで私は子どもの気持ちを何も聞いていなかったし、子どもも自分の気持ちを言えていなかったことに気がつきました。子どもに『お母さんのことは大嫌いだったよ』とか、『お母さんが忙しいときは八つ当たりされたよ』と言われると、そうだったなあと、仕事の事しか頭になかった当時の事を思い出します」

幼少期のころは外来勤務だったが、郁夫さんが小学校に通い始めるころに病棟勤務となり、しかも管理職になったため、日勤の時でも午後11時ごろに帰宅することもあった。そんなときは郁夫さんはそう遠くない所に住んでいる祖父母の家に行って過ごすことが多かった。

「私が一番ショックを受けたのは、子どもが私に近づくことができないんです。何かの拍子で、間違っ^て子どもに触ったところ、例えば手だったら手を汚いものが付いたように本当によく洗っていたんです」

母親の愛情を求めていたのに、振り向いてくれなかったので、母親を汚い存在と見なすことで、自分の気持を納得させていたのだろうか。そんなにまでして自分を追い詰めていた郁夫さんだが、恵子さんが「ああ、疲れた。肩が凝った」と話すと、指圧をしてくれるまでに二人の関

係は回復してきた。

「でも私に直接触れないようにタオルを敷いて指圧してくれるんですね。そんな子どもの痛々しさに『ごめんね、本当にごめんなさい』と、謝るしかなくて…」

恵子さんは郁夫さんの話を真剣に聞こうと努めたが、仕事で疲れている時は居眠りをしてしまう。その母親の姿を見ても郁夫さんは、大声を出さない。あるとき、「お母さんは聞きたくないんだね」と言う。「聞きたくないんじゃないじゃなくて……」と恵子さんは謝るしかなかった。

郁夫さんは「ゆるしてあげる」「お母さん、ゆるすよ」「今までは嫌いだっただけど、お母さん、好きだよ」と言って慰めてくれるのだった。

だが郁夫さんの部屋の襖はボロボロで、ほかにも壊れた物が散乱し、足の踏み場もないほど。断絶していた親子関係が回復するにつれて、自立という新たな問題に直面し郁夫さんは葛藤かっとうを続けていたに違いない。

「母の優しさ」が理解できない

カウンセラーのアドバイスもあって、郁夫さんの口から出る言葉の一つ一つが、恵子さんの人生を幼少期から振り返らせていく。

「私、やっぱり赤ちゃんのときから愛情をもって育てていなかったと思う、お腹にいるときからそうだったんじゃないかな。私、母からちゃんと愛情をもらわなかったから」

これまでフタをしてきた過去の記憶が次々と恵子さんのなかでよみがえってきた。

「私、子どものころ、母から虐待されたんです。母は2カ月くらいの周期で爆発していました。私と妹は布団たたきで叩かれて、髪の毛をたたれて家中引きずり回されて、たぶんギャーギャー泣きわめきながら」

小学校低学年のときのことだ。学校の用事で帰るのが遅くなった。その日は弟の誕生日だった。

「帰ったら、母からいつもみたいに髪の毛を引っ張られ、家中引っ張り回され、蹴けられて、打たれて…。その後1週間くらい魂が抜けたみたいにボーとしていました」

言葉による精神的な虐待もあった。「お母さんはいつもあなたのことを考えてるんだよ」と言うのが常套手段^{じょうとうしゅだん}で、子どもの言い分には耳を貸さなかった。

「言葉の暴力もすごかったんです。家では母親の言う通りにしないとだめで、私の希望とか意志とかは絶対、通らないんです。友だちとどこかへ出かけて『何が食べたい』と聞かれるけど、私は何が食べたいんだかわからない。自分が何をしたいんだか、何が好きなんだか、嫌いなんだかもわかりませんでした。逆^{さか}らっても自分の思う通りにならないから、自分の思いは初めからないほうが楽でした」

家族全員が熱心なカトリック信徒^{よゆうり}。要理の時に神父の口から出る「親の言うことを聞かないと地獄に落ちるよ」という言葉が胸にささって、恵子さんは自分の思いや感情にフタをすることで生き延びる道を選択せざるを得なかった。最近の研究では、幼少期に虐待にあうと、感情の機能を司^{つかさど}る脳の一部の発達^{そがい}が阻害されることが分かってきた、という。

「母はしっかりした人でした。でも優しいと思ったことがない。実は私も小さい頃、母にくっつきたいと思ったけど、母は触れさせてくれなかったんです。結局、私は親から育てられたように、子どもの気持ちを受けとめられずに育ててしまいました。子どもと話しをするようになって、初めて私はそれまでの子どもとの違和感がわかりました」

恨^{うら}まない子どもをつくりたい

自殺系サイトで知り合った女性と一緒に生活するため、郁夫さんが家を出たのは、自死する1年半前。「女性がリストカットするので心配だから一緒にいる」という説明に、恵子さんは「不安だが仕方がない」と思った。自死する4カ月前、二人は恵子さんの家の近くに引っ越してきた。そして自死したことを警察からの連絡で知った。

実は自死する数日前、郁夫さんから恵子さんにメールが届いた。

「もしかしたら死を選ぶかもしれない。でもぼくには理想がある。自分の子孫に恨まない子どもをつくりたい。恨むことは自分のところでストップさせたい。恨まない子どもをつくりたいんだ」

郁夫さんが自死した後、ホームページや残した日記を見て驚いた。

「いろいろなことで追い込まれていたようです。子どもが作ったホームページを見ると、自分の生きる道がみんな閉ざされてしまって辛いと書いてありました。真剣に生きる道を探していたんです。ノートを見ました。『自分は生きるために死にたい』『死んで言いたいことがある』。私はそれを読んだとき気が変になりそうでした」

傷ついた人と生きなさい

郁夫さんの死後、恵子さんは「もう一度でいいから子どもに会わせてください」と祈った。

「そしたら小さな子どもの足音が聞こえ、私のお腹の上に乗った感覚がしたり、子どもの声変わりしていない声で『お母さん』って聞こえたんです。私はそのとき『神様、これで十分です』と言ったんです」

恵子さんはどんどんやせていった。「ああ私もたぶんこれで死ぬるんだ」と恵子さんは思った。

しかし、そんなとき恵子さんはある神父と不思議な出会いをした。自分のありのままの気持ちを語り、受けとめてもらった。そして、過去のことを振り返るなかで、ゆるしの秘跡ひせきを受けた。

「私は、子どもは自分の人生を捨てたとは絶対に思えないんです。すごくしっかり生きたと思っています。ゆるしの秘跡を受けたとき、子どもにゆるしてもらったと実感しました」

神父の勧めで恵子さんは重度知的障がい者のグループホームで障害を持った人たちと生活を共にした。

「そこでジャン・パニエを知りました。ジャン・パニエの本に、『傷ついた人はイザヤの53章のような人だ』と書いてありました。私、初めてイザヤ書53章を読んだんです。そしたら、私の子どもそのものだと思ったんです。……それで子どもとイエス様がすごく重なるんです。私は、人と人とのつながりを生きられなかったために、息子を障がい者にしてしまった。だから、ジャン・パニエが言う『傷ついた人と生きなさい』というのが、息子のメッセージでもあると思っています」

子どもたちの行き着く場所

被虐待児の対応に苦悩する現場

「もうクタクタですよ。施設に入ってくる子どもたちの半数が虐待を体験しています。そうした子どもたちは何を考えているか分からないし、次の瞬間に何をするか予測がつかないんです」——関西地方の小都市にある児童養護施設で働く山下健仁さん（55、仮名）は、大きなため息をついた。富む者と貧しい者との格差が拡大し、最下層の子どもたちは、虐待や親の薬物依存の後遺症など、想像もつかないような極限状態おちいに陥っている。そんな子どもたちを相手に、山下さんはじめ児童養護施設で働く職員たちは心身ともに疲労困憊ひろうこんばいの毎日を送っている。

人間関係を結ぶのが難しい子どもたち

「お前がいるから母さんは家から逃げたのだと祖父に言われ続けた子や、父親似だからと母親にせっかんされたり、大好きだった父親が病死した後に、母親が他の男と付き合い始めて、家に帰るのが嫌でイライラして放火した子など、虐待によるトラウマ（心の傷）を抱えた子どもたちが増えてきたんです」

従来の児童養護施設への入所理由は、両親の離婚、サラ金で崩壊した家庭、母親の病気や交通事故死などが大半で、公園や産院に置き去りにされた子もわずかにいた。ところがバブル経済が崩壊した1990年代から、アルコールや薬物、覚せい剤依存の親から生まれた子ども、そして家庭内暴力や、さまざまな形の虐待を受けた子どもたちが入り始めた。

「彼らの特徴は人への警戒心が強く、甘え方を知らない。職員は、いつもこちらを試してくるような子どもたちを相手にして、細かいケアをし続けなければならないんです。注意したら笑い出す子や目を合わせない子に思わずカッとなって胸ぐらをつかんでしまうこともあります。子どもとの人間関係についていけず、自己嫌悪おちいに陥り、まるで燃えカスの

ようになり、途中で病気になったり、辞めて転職する職員もいます」

かつての職員は子どもへの愛情さえあれば、いつかは理解してもらえると信じ、心を尽くして子どものために細かいケアを続けてきた。苦しい時には、「これも神様の恵み」「報むくわれる日が必ず来る」と自分に言い聞かせ、何とか耐え忍しのぼうとした。

「しかし虐待を受けてきた子どもの心の傷は予想をはるかに越えて深く、どのように接し、声をかけたら、子どもの心を開くことができるかが分からない。人間関係を取り結ぶことが実に難しいんです」

性的虐待を受けた子が爆発すると…

今、施設で手に負えなくて対応に頭を痛めている中学二年生の女の子(14)は、母親と同棲中の男からの性的虐待を受けてきた子である。

「担当職員は彼女の心を開くことに心がけていますが、虐待については思い出したくもないのか、一切、口にしません。もともと彼女は母子家庭でしたが、母親が同棲を始めた男に性的暴行を受けて、ここに入所してきたんです。しかし男と別れたからと母親は娘を引き取ったのですが、実は別れていなかった。再び彼女は性的暴行を受け続け、傷だらけになって戻ってきたんです」

感情の起伏が激しく、機嫌の良いときは大声を出してはしゃぎ回る。ところが何か彼女の意に添そわないことがあると、突然、キレて態度が一変する。担当者は彼女が機嫌の良いときに、買い物と一緒に رفتったり、何とかコミュニケーションをとろうと努力を重ねるが、人間不信が強いのだろう。一切、個人的なことは話そうとしない。

「一度は、学校でいじめられたのか、ものすごい怒った顔をして帰ってくるなり、同じ部屋の幼児を脅おどし、物を投げつけたんです。恐らく過去の虐待のフラッシュバックで頭が真っ白になっているんだと思います。もう手に負えなくなる。目をつり上げ、注意した職員に向かって固く握りしめたげんこつで殴りかかる。そうすると職員だけでなく、周囲の子どもたちも、恐怖におびえてパニックに陥ってしまうんです」

そんな恐怖の場面そうぐうに遭遇した幼児のなかにはショックを受け、翌日、

幼稚園に行っても落ちつかない、集中力もなくなり、先生の話も聞けず、暴れる子もいる。結局、幼稚園から「何とかして欲しい」と言われ、担当者も傷つき、施設長に「子どもの施設変更をしてほしい」と訴えた。

「担当者はひどく傷つき、自分の力量のなさを痛感し、施設変更を申し出た自分は彼女を捨てたのではないかと悩みに悩む。自信はズタズタに壊され、虚しさだけが残ってしまう。そんな姿を見る私もつらいんですよ。こんな繰り返しの毎日と言っても過言ではありません」

そもそも児童養護施設には、治療や療育を必要とする子どもを受け入れる力がない。従来の児童養護施設の役割は、家庭で生活できない子どもたちの生存権を確保し、社会での自立を支援することだった。だから子どもたちがいかに安心して、気持ちよく生活でき、自立のために必要な生活様式を集団生活のなかで身につけるかを考えればよかった。

「ところが知的障害があるため養護学校に通う子や精神科を受診する子がこれだけ入所してくると、心豊かな人間性をはぐくみたいという願いもなかなか実現できないんです。施設に入ってから親が行方不明になる。再婚した親のなかには子どもとの再会を拒絶する人もいる。家庭に引き取ったはいいが、再婚相手への気兼ねから実父、実母が子どもを殴ったり、蹴ったりといった虐待をするケースも多くなってきています。子どもたちの半数が虐待を体験していますね」

胎児性アルコール症候群の子も

親からの虐待のほかに、親がアルコールや薬物依存症のため、胎児性アルコール症候群と診断される子どもも増えている。

「空間感覚がつかめないのか、狭い棚の間に自分の首を突っ込み抜けなくなったり、危ないと分からずに高い所に上って飛び下り、骨折してしまう。だれが見ても投げたら危ないと分かる大きな石を周囲に投げつける。どうもおかしいので医者にみせたら胎児性アルコール症候群だと診断されました。母親は妊娠中に浴びるように酒を飲み、食事でも食べたり、食べなかったりの生活を続けていたのでしょう。その子は、知的にも遅れがある。言葉が理解できず、場面が変わると混乱し、興奮状態に

なることが多いんです」

虐待の連鎖^{れんさ}を断ち切るためには、虐待を受けた子のトラウマを早い時期^{いじ}に癒すことが必要である。児童相談所の一時保護施設から子どもが送られてくる時は、その子についての連絡事項に、一時保護の理由が書いてある。それを見た職員の多くは虐待児だと認識するものの、虐待を受けた心の傷をどうやってケアしたらよいかは手さぐり状態である。

激務でダウン、自宅静養に

「心に傷を持った子は、大人から暴力による支配を受けているために、他人に対しても暴力的に振る舞う。職員より施設経験の長い子もいます。そこに何をやっても不器用で、動作が遅く、注意をすると口答えするような子が入ってきたら、どうなると思います。いじめが始まるんです。ターゲットを決めてみんなで攻撃する。攻撃している間は自分は支配する側にいるから、いじめられずにすむわけです」

虐待児に対処するためカウンセラーを置いている施設もある。

「しかし、多くの児童養護施設は職員の確保だけで精一杯で、カウンセラーを置く余裕はありません。だから個人的に虐待問題に関心を持った職員がさまざまな研修を受けて、対応するしかないのですが、施設長が虐待問題に理解を示さないと、組織ですから、芽をつまれてしまうのが現実です」

成果主義による企業利益優先の社会では、かつて100人で稼ぎ出した利益を3分の1の人材でまかなう時代になってきた。多くの人たちが企業からはじき出され、その日暮らしの生活に追われている。いやおうなく迫る社会構造の変革のなかで、家庭の機能は崩壊し、共働き家庭が増え、深夜勤務、交替制などのパート勤務のため、不規則な生活が日常的に続く。孤立した子どもたちを寂しさが襲^{おそ}い、夫婦もすれ違いなどで本音を話すこともできず、孤立感を深めていく。

そうした社会変革の犠牲となった子どもたちを引き受ける児童養護施設。困難^{きわ}極まる激務に、山下さんは身体だけでなく精神的にも限界に達し、自宅での静養^{よき}を余儀なくされた。

これが現代の^{どれい}奴隷貿易、奴隷労働だ 性暴力に耐えるフィリピン女性たち

長雨に打たれながら線路伝いに探していたら、プレハブ二階建てアパートのドアにNGOの看板が目に入った。三畳間と四畳半の板の間。入り口の脇にダイニングキッチン。ここがフィリピンから人身取引などでやってきた女性たちの憩いの場であり、相談の場、そして“復活”の場だった。女性労働者といっても大半は、暴力団が取り仕切る風俗店で、日本人男性の相手をしながら、フィリピンに住む家族へ送金している女性たちだ。「不法滞在」のため公的機関に助けを求めることは難しい。そんな彼女たちを支援しているドナさん（50）も、かつては人身取引の被害者だった。

人身取引の被害者だった私

「日本に来たのは、小さいときからあこがれがあり、日本に住みたかった。だからマニラの日本料理店で働いていた」

24歳のドナさんが初めて来日したのは1982年。当時、フィリピンには8歳と6歳の女の子がいた。10人兄弟の真ん中、シングルマザーのドナさんは子どもを育てるのに日本で仕事があると聞いて飛びついた。

「私の仕事ね、最初、スナックと言われて。スナックはフィリピンでは食べ物屋さん。レストランとかコーヒーショップとか。私、お料理好きだから、あっ、これいいなあとって」

ブローカーやオーナーが渡航の手続きを整えてくれた。働き手が必要な日本と、働き場を求めるフィリピンの思惑が一致した程度にしか、当時は考えていなかった。最初に働いたのは沖縄のスナックだった。

「初めは言葉、全然わかりません。大変だったよ。毎日、泣いてたよ。（お客が）お酒入れて、『これ、あなた飲みなさい』。何で私が飲むの？」

スナックが風俗店で、だまされたことに気づいた。給料から渡航費用

を差し引かれ、1カ月分の給料も受け取らず、2カ月で帰国した。

最近は入国管理が厳しくなるなかで来日方法も極めて複雑になり、犯罪組織もグローバル化してきた。日本政府は2005年6月の刑法改正で「人身売買罪」、同月の入管法改正で「人身取引の定義規定」を新設、被害者に対して特別在留が可能であることを明示した。しかし当時のドナさんは、自分が人身取引の被害者であることに気づいていなかった。

結婚したらヤクザだった

フィリピンで2人の子どもを女手一つで育てるのは難しい。今度はだまされないように友人を頼って観光ビザで再び日本へやってきた。

「埼玉県にあるその店にはタイ人、中国人、フィリピン人いっぱい、働いてたよ。ママさん、自分の家にタイ人住ませ、お客さんから電話がかかると女性、選んで外に出したの」

管理売春をさせていたのだ。

「あるとき、私も同伴するよう言われた。私、そんな仕事嫌だと言った。オーナーとすごいけんかした。このままだと危ない。逃げるしかない。友達のいる大阪に逃げたの。一カ月ビザ残ってたから仕事して」

日本の性産業は10兆円産業と言われている。買春に使われる人身取引の陰には買う男がいることも問題の一つだ。また日本とフィリピンの経済格差が人身取引の大きな誘因でもある。世界中で人身取引の被害者は毎年60万から80万人、被害者の大半は女性と子どもだ。彼女たちの多くは日本に着いた時には、既に法的には返す必要もない借金を押し付けられている。300万円、500万円という。「返さないで逃げれば家族の生命がないぞ」と脅される。「家族のために、自分一人が犠牲になればいい」と、女性たちは自由を奪われてしまっているのが現実だ。

ドナさんは身の危険を感じても日本にとどまって働く道を選んだ。

「自分の国で同じフィリピン人にさげすまれ、傷ついたの。差別から逃げたかった。差別されない日本、住みたい。子ども学校やりたい」

大阪で新たな^{わな}罠が待っていた。お客の中に車イスの紳士がいた。困っている人にいつも心を動かされるドナさんは、結婚した。

「私、ヤクザから逃げた。だけど、また、彼、ヤクザだった。仕事はビデオとテレビのレンタル。奥さん、私で5人目だって。私、死ぬと思った。フィリピン、帰れないと思った」

夫が麻薬常習者だと知ったのは、結婚1年後のことだった。その頃には夫は車イスなしで生活できるまでに回復していた。

「彼に文句言ったよ。そしたら『黙って付いてくればいい』って、いっぱい殴られちゃった。眠れない。食べられない。ずっと見張ってる。仕事に行くときも連れて行くよ。縛られちゃった。手も足も。タバコの火、押し付けられた、注射、腕に刺されそうになったよ。私、泣いて泣いて。暴れた。叫んだよ。もう、どうでもいいって。あきらめたよ。でも、私、神様信じる。祈ったよ。死んじゃうならおしまい。暴れたよ」

何度か逃げては捕まって虐待されたドナさんはフィリピンへ逃げた。だがドナさんは、ビザの期限が切れないうちにまた日本に帰って来た。

「どうしても離婚しないと危ないと思ったよ。フィリピン大使館に行って相談した。『あなた、日本人と結婚してるでしょう。日本の役所行ってください』って。驚いたよ。怒ったよ。でもよく考えたら、他のフィリピン人たち、そのまま死んでる。大使館、何も助けてくれない」

呼び寄せた娘を夫がレイプ

不安と生命の危険を感じたドナさんは、関西から関東に移って、隠れた。そこで現場でまじめに働いていた男と出会い、男の子に恵まれた。

「元の旦那に子どものこと話した。奇跡みたい。彼、自分で離婚の手続きしたよ。子どものためね。いい家庭できると思った。だから子ども呼んだよ。1992年頃かな。下の娘、17歳なってた。家族一緒、これ夢だった。うれしかった。でも、娘、呼んだ時、彼、変わった。『あなたの娘、食べさせない。私の娘じゃないよ』って。家族が壊れないよう、私、夜も働いて娘、食べさせた。娘が息子の面倒見てた。ダメだった。もっとすごい大きな問題。娘、旦那にレイプされた。これ、もう絶対ゆるさない。殺してやりたい。でも、殺したらおしまい。つらかったよ。息子見たら何も出来ない。子どものため我慢した。でも、刑務所入れてやり

たい。裁判したい。でもお金ないよ」

ドナさんは友人に教えられ教会の支援団体に駆け込んだ。

「本当、私一人じゃないと思った。もう泣いて。力いっぱいになって。何かもう、復活するみたい。そこで出会った人たちから力もらった」

法改正で交番（警察）には人身取引被害者の保護が義務付けられた。だが不法滞在を余儀なくされている被害者は、交番に駆け込むことはできない。政府は婦人相談所を人身取引被害者のためにも活用することにした。だが人身取引被害者の多くは超過滞在者で、社会保障を受けることが出来ない。日常生活、医療、カウンセリングの問題は既存の公的保護施設ではほぼ不可能である。性産業から有力政治家に莫大^{ばくたい}な政治献金があることを考えれば、保護法が充実していないこともうなずける。

もっと教会が被害者の保護を

ドナさんは自分が助けられた体験を生かして外国人女性のための支援団体を立ち上げ、今は共同代表として活躍している。

「日本政府の対応、政治的。少子化問題からしか見てない。人は人であるから大切、人を政治の手段に使うって欲しくないよ。女性たちの中に力ある。エンパワーした力、みんな出しあって、自分も、社会も変える。このこと、女性たちが教えてくれた」

自分たちだけでなく、社会を変えていくことを彼女たちから学んだという。現代の奴隷制ともいわれる人身取引の被害者だったことが、女性たちの心に深い傷を残し、女性たちと子どもたちの人生に大きな重荷を背負わせている。そのことを心にとめて欲しい。そして被害者を保護する場が教会の中に確立できることを願っている、とドナさんは訴える。

16世紀に近代資本主義の成立とともにアフリカ、ヨーロッパ、アメリカを結ぶ三角貿易による奴隷貿易と奴隷労働が盛んに行なわれた。人間の尊厳^{そんげん}を踏みにじる虐待の極致ともいべき奴隷貿易は今はない。しかしよく考えてみると、日本の風俗店で働くフィリピン女性たちは、形を変えた現代の奴隷貿易、奴隷労働の被害者ではないだろうか。ドナさんの話を聞いて、そう感じたのは私一人ではないはずだ。

7, 80代の女性も被害を訴える

第三者機関の設置こそ必要

5年前の2002年1月。アメリカのボストン教区で発覚した神父による児童に対する性的虐待事件は、世界的に大きな波紋を広げた。2年後にアメリカ司教団の真相糾明委員会が出した報告書では、アメリカでは53年間に約4,400人の聖職者が10,000人の未成年者に性的虐待をしたことで訴えられている。被害者の80%は男性で、のうち11歳から14歳までの少年が40%を占めていることが明らかにされた。被害の訴えを司教が握りつぶしたり、加害者の神父を他教区に異動させたりして秘密裏に処理したのが被害を拡大させた。教会組織の権威者の判断ミスが隠蔽体質を生み、組織の根腐れ現象となって、最悪の事態をまねいたわけだ。

日本カトリック司教協議会は2002年6月、日本でも聖職者、修道者による子どもへの性的虐待があったことを認める司教団メッセージを発表した。そして翌年2003年2月には、司教協議会に「子どもへの性的虐待問題に取り組むプロジェクトチーム」を発足させ、そのチームは「聖職者による児童性的虐待への対応」のガイドラインをつくった。

司教協議会は同じ過ちを繰り返さないためにカトリック中央協議会社会福音化推進部に「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」を設置した。デスクは、教会共同体内部の実態を調べるためにセクシュアル・ハラスメントについてのアンケート調査を実施した。その結果は2006年3月に「セクシュアル・ハラスメントに気づくことから」=あらゆる暴力にNO!という教会を目指して=という小冊子となった。その担当者である社会福音化推進部部長のシスター石川治子さんに話を聞いた。

「あなたが悪い」と相手にされず

「日本の場合には児童虐待よりも女性に対するセクシュアル・ハラスメントが多いだろうと推測し、このアンケートを採ったのですが、回答の

あった女性86人のうちセクシュアル・ハラスメントを受けたことがあると回答した方は25人。そのなかの16人が身体的接触の強要を受けていました。『黙想の指導中に胸を触られ、キスされた』とか、『つい立てのない告白所でセクハラ行為をされた』などと具体的に書いてありました。デスクには被害者から電話が何本もかかってきました。しかしこれは氷山の一角で、実際には、被害を受けた女性たちはもっとたくさんいると思います。問題なのは、被害を受けたことのある人の半数近くの人がだれにも相談していないことです」

教会は本来、弱い立場の人の権利を守る使命があるはずだ。にもかかわらずセクシュアル・ハラスメントの防止や対策については、一般社会の取り組みに比べても、かなり遅れている。相談しても真の解決にいたらなかったケースがほとんどだという。

「というのも回答を見る限り、被害者の側に立った対応はごくわずかで、相談を受けた人が『神父さんがそんなことをするはずがない』『教会の恥になるからオープンにしないでほしい』などと、被害者よりも組織を守ることを最優先してしまうからで、本当に困ったことです」

セクシュアル・ハラスメントの被害にあった女性の大半は、「自分の存在が軽く扱われた」と感じ、自尊心を深く傷つけられている。しかも「自分に落ち度があったからだ」「はっきり断らなかったのが悪いのだ」と逆に自分を責め、自己嫌悪に陥り、不安定な心理状態に陥っている。そんなときに、相談した相手から「なぜ抗議しなかったの」「ゆるすべきよ。ゆるせないのはあなたに愛がないから」などと言われると、さらに傷つき、孤立感を深め、追い詰められていく。

性的虐待は犯罪だという認識を

「さらに問題なのは『愛の共同体』とか『ゆるしの共同体』といった理想的な共同体の姿への期待が、被害事実を見えにくくしていると同時に、聖職者個人の責任の所在をあいまいにしていることです。加害者が聖職者であっても、私たちと同様、過ちを犯す弱さを持っている普通の人間なんです。だから被害を受けた人は相手が聖職者であっても、性的

虐待は犯罪なのだから、警察に訴えてもよいのです。それを聖職者だからと遠慮して、加害者をゆるせない自分を責めたり、また相談を受けた人が被害者を責めたりすることは筋違いです。間違っています。このことをぜひ、信徒の方たちは自覚してほしいと思います」

このようにあってはならないことが、教会のなかで行われ、多くの場合、表ざたにならず、長い間、隠蔽いんぺいされ続けてきたのは、どうしてなのだろう。アンケートの報告書は、被害者とその周辺いんぺいの多くの人たちは、長い歴史の中でつくられてきた教会の位階いはい制度など権力構造のなかで、一般信徒は何を言っても無駄だ、自分たちは無力な存在なのだと最初からあきらめてしまっていることが組織を硬直化させる大きな原因だと指摘している。

「そもそもイエスの時代は男性優位の社会でしたから、教会組織も男性中心でできたのはわかりますが、今は信徒の6割以上が女性ですから、女性の声に耳を傾け、女性の力を認め、女性に責任ある仕事を与え、任すようにしないと、教会はますます時代に取り残されていくと思いますね。せめて小教区の教会委員の半数は女性を入れるようにしないと……。教会委員に外国人や女性も入れようと努めている教会もあると聞いていますが、まだ少数ですね」

被害を訴える7, 80代の女性たち

報告書の最後に折り込みの形で、アンケート用紙を付けて、感想と意見を求めたところ、16通がデスクに寄せられた。女性が9人、男性が7人で、女性の場合は、多くが聖職者からセクシュアル・ハラスメントを受けたという訴えだった。

「若い頃、外国人神父から被害にあい、それによって健康を害してしまいました。仕方なく修道会を退会しましたが、未だに心の傷を引きずっています」(70代の女性)

「教会で外国人神父にセクハラ的一步手前までされて、自分としては外国人神父に対する不信感をぬぐえません」(70代の女性)

「神父からセクハラを受けました。この小冊子を読んで、いろいろな

ことを知り、いまさらながら悔しい思いです。誰に相談してよいかわからず、精神的に病んで、社会復帰できない状態です」(30代女性)

「今まで誰にも話すことができず胸に秘めていた心の傷を、こういう形で初めて出されたことによって、少しは気が楽になったのではないかと思うと、本当に報告書をつくって良かったと思います。でもこれだけ長い間、苦しみ続けてきた人々がいるということに、痛みと怒りを感じます。若いときに受けた一回限りのことであっても、人生を台無しにされ、傷を7, 80代まで引きずっている。しかも身体的あるいは精神的な病という重荷を背負っていることを、加害者の神父は忘れちゃってるかもしれない。その不合理さに怒りを感じますね。だから聖職者のセクシュアル・ハラスメントの問題に対して教会として真摯^{しんし}に対応しなければいけないと思いましたね」

一刻も早く第三者機関の設置を

司教協議会のプロジェクトチームがつくった「聖職者による性的虐待への対応」のガイドラインには、被害者やその家族から訴えや相談を受けたら、その事件の真偽を審査する第三者機関を設置することを求めている。第三者機関の構成員は、正しい判断力を備えた人で、教区に雇用されていない人、信徒、専門家（カウンセラー、弁護士など）で構成し、少なくとも一人は司祭、一人は性的虐待の専門家が入ることが望まれる、訴えがあってから機関をつくるのではなく、あらかじめメンバーを任命しておく必要があると記してある。

「でも調査機関を設置し、実際に機能している教区はまだないようです。結局、被害者の訴えがあったときは司教が処理しているのが現実で、司教によって、きちんと対応している教区と、そうでない教区との格差があるようです。このままの状態では、アメリカの教会の二の舞になりかねません。本当に真剣に取り組むためにも、あそこに訴えれば何とか話を聞いてもらえるという第三者機関を全国あるいは教会管区の中にせめて一ヶ所でも早急に立ち上げる必要があると思います」

本誌の編集にあたり、下記の点に留意しておりますが、お気づきの点がありましたら、ご指摘、ご教示いただけましたら幸いです。

- (1) 面談者のプライバシーに差し障る関係者、場所、その他の名称、氏名、住所、固有名詞等については、本人の承諾をいただいた方以外は、すべて仮名とさせていただきます。
- (2) 差別語、不快用語につきましては、厳正な検討を加えて注意をほらいましたが、面談者が話しことばで使われている用語、用法はそのまま使用している場合もあります。

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障がい者その他の人のために、録音又は拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項によりいっさい自由である。

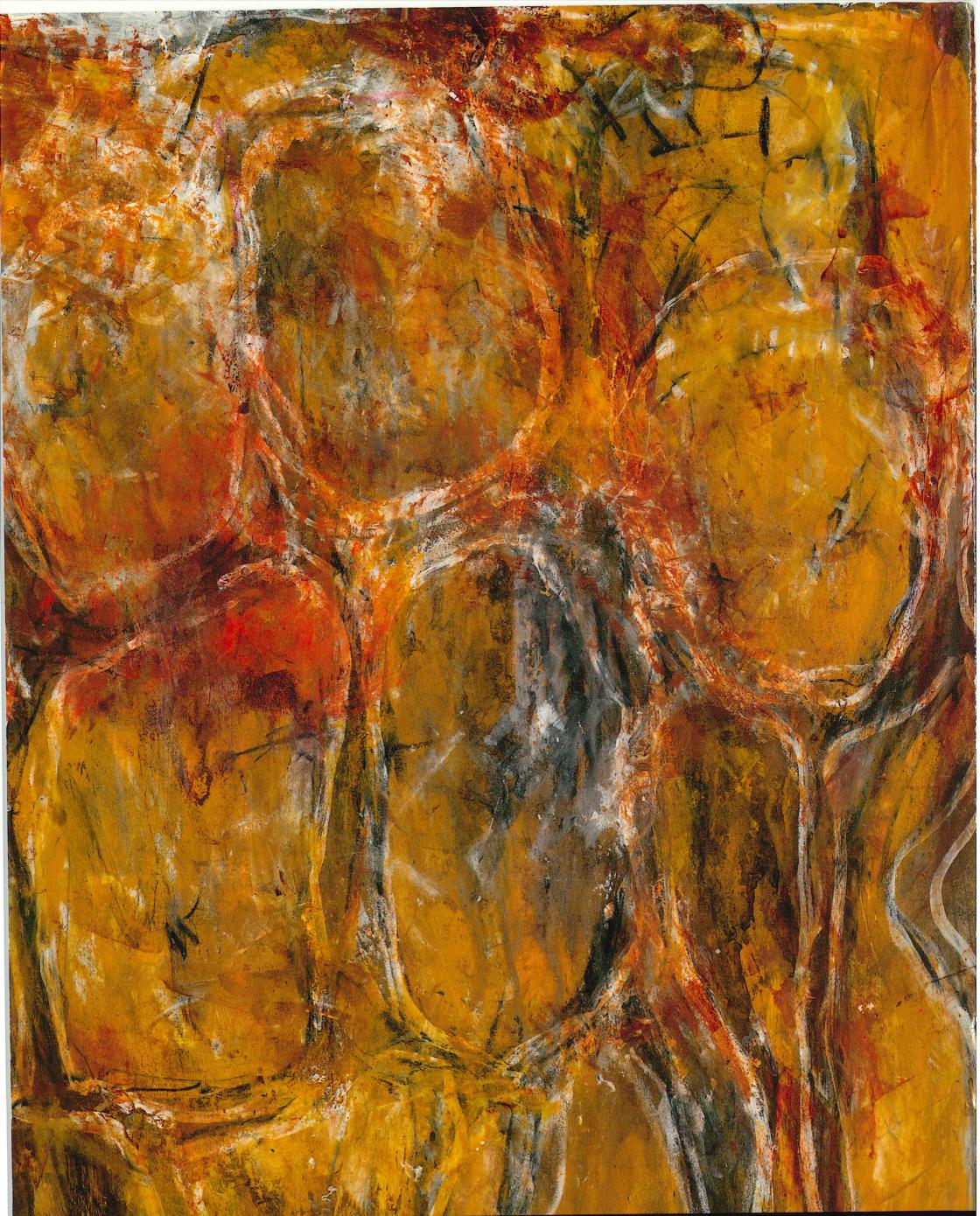
「四旬節キャンペーン課題解説」No.21 2007年

「ひびき 2007」

2007年2月21日 発行

編集 日本カトリック司教協議会カリタスジャパン
発行 カトリック中央協議会
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10
日本カトリック会館内 電話 03-5632-4411
カリタスジャパン 電話 03-5632-4439 (直通)

印刷 精興社



カトリック教会

カリタス ジャパン

〒135-8585 東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館 TEL 03-5632-4439 FAX 03-5632-4464